

⑦ 福島県いわき市 / ネモト 根本茂樹さん

仮設住宅の住民、除染作業員のため 震災後2カ月で売店を開店



広い仮設住宅の敷地内も軽トラで配達する。住民の人々にも最近ようやく笑顔が戻ってきた

楡葉町内で2軒のスーパーマーケットを経営していた根本茂樹さん。震災後、楡葉町全域が無人状態に。楡葉町への復帰を見据え、現在は軽トラを駆使して、仮設住宅の住民たちと除染作業員の日常を支えている。

震災から1年半以上たった昨年晩秋のある日、福島県楡葉町では、除染作業が黙々と行われていた。

住民はいない。汚染土を袋一杯に詰めた大きなビニール袋が町のあちこちに積まれる。作業服姿の男たちが町を歩く。

震災前、この町でスーパーマーケットを2店経営していた株式会社ネモトの代表取締役根本茂樹さん（51）はこの日、軽トラでの商品配達の帰りに、無人となった楡葉町のスーパーを久しぶりに訪れた。

「外観はあの日のままですが、見ての通り、作業員しか周囲にはいません。かつてのにぎわいが嘘のようですね」

いわき市の応急仮設住宅で 必需品特化のスーパーを経営 作業員の生活拠点に物資を運ぶ

いわきの市街地には榊葉町民のための仮設住宅が2カ所ある。そのうちの1カ所、上荒川応急仮設住宅の敷地内にある仮設商店街で、根本さんはミニスーパーを経営している。

現在の根本さんの1日は、朝このミニスーパーを開いた後、

店をスタッフに任せて、軽トラで除染に携わる作業員がいる浜通りのいくつかの拠点まで食品や雑貨を配達する。

原発周辺の町村で進む除染には、全国から多くの作業員が集まっている。作業員の生活拠点が、浜通り沿いのさまざまな公共施設を使って整備されている。

だが、避難指示区域のため、原則立ち入りが禁止されており、一般の商店は営業していない。そこで根本さんのようなスーパー経営の経験者が各拠点に食品や雑貨を配達している。

これらが終わって昼過ぎにミニスーパーに戻り、閉店まで店番や事務作業等を行い閉店後、いわき市内にある自宅に戻る。

震災後、根本さんが最も悲しんだのは、原子力発電所事故で避難指示を受けた町に入り、陳



ミニスーパーの営業は主にスタッフに任せている



久しぶりに訪れた榊葉町で営業していたスーパー。除染作業員のなかに知人を見つけ、しばし談笑する

列していた商品を外に運びだし、廃棄したときだ。
「震災のあった金曜は週末ということでスーパーにとってはか

き入れどきなんです」と根本さんはいう。ある程度落ち着いてから店を見に行くと、大量の生鮮食品の腐敗が進んでいた。2



開店前の仕入品の積み下ろし作業。この後根本さんは除染作業員が集まる浜通りの拠点を経トラで回る



仮設住宅の住民には新鮮な海の幸がうれしい

トントラック5台分の商品を廃棄した。

「商売人が、自分の仕入れたものを捨てる。こんなに悲しいことはないんです」

その後周辺が落ち着くと、原子力発電所事故の収束や除染のために全国から作業員が集まっ

とにかく従業員たちを守りたい 再雇用したくて営業を再開

楡葉町で2店舗を経営していたころに比べて、売上が激減したのはいうまでもない。

てきた。一昨年5月、広野町の作業員宿舎に売店をオープン。昨年5月まで営業を続けた。続いて8月、Jヴィレッジ内に売店をオープン。そして12月に仮設住宅の一角にミニスーパーをオープンさせた。いずれにおいても軽トラが大活躍している。

「おやじの代から引き継いできた楡葉町でのお客さんからの信頼関係。その上での商売。そう



商工会から貸し出しを受けた2台の軽トラは仕入れ、配達などにフル回転している

いう土台が一瞬にして失われたのが本当につらい」

と根本さんは語る。

榎葉町民は震災前約7700人だった。当時経営していた2つのスーパーマーケットは、この7700人という下地があればこそ成り立っていた。

一方、現在仮設住宅に住むの

は240世帯程度。市街地なので近隣の一般住宅からも買いに来てくれるお客さんもいるが、競合店も多い。

そうした事情もあって、今後根本さんは移動販売を強化する構想もある。榎葉町民が集まる地域を巡回するイメージだ。

しかし根本さんは、現在の率直な心境を、

「何となく宙に浮いているような感じ。根が生えていない感じ」と表現する。

震災、原発事故の後で、根本さんが何より守ろうとしたのは従業員の雇用だった。いままですーパー経営を支えてくれた従業員を1人でも多くを再雇用したい。その思いで配達やミニスーパーの営業に踏み切った。

だが、ふと我に返ったときに、どこにも根を生やしていない自分自身の境遇に気づく。

いわきにあるミニスーパーも、Jヴィレッジの売店も、いずれは役割を終えるときが来るだろう。そのときに、どのように商売を再興させればよいのか？



国道沿いの物流センターで新聞・雑誌類の仕入れ

「榎葉町が一体どうなるのか？どのぐらい人が戻ってきてくれるのか？ 先行きが見えない」

避難できない人たちにかつての店の鍵を預ける

榎葉町の隣の広野町に、精神・

神経科系の病院がある。避難区域となったが、患者さんの統率が難しいこと等もあり避難を断念。しかし物流も途絶えて食べ物・の備蓄が切れ、深刻な事態に陥った。

震災から2〜3日後、避難先の根本さんにメールが届いた。その病院の関係者からだった。

「食糧が尽き困りに困って、私の経営していたスーパーに行けば何かあるんじゃないかと、無人の店に向かったらしいんです。店の裏にまわると倉庫の鍵が偶然開いていたので、なかに入り食糧を物色し持ち出した。そのメールは僕にそのことを伝え、許しを請う内容でした。たいへん申し訳ありませんでした、と書かれていました」

自分の店に行けば何かあるんじゃないか——そう思っただけでも、根本さんとしては商人冥利に尽きるできごとだった。後日、根本さんはメールくれた病院を訪ねて、その関係者にスーパーの鍵を預け、「好きなものを何でも持って行ってください」と話した。

こんなすばらしい信頼関係を無駄にしたくない。根本さんは榎葉町に帰還できる日をめざして、今日も軽トラで浜通りを回っている。

【3.11で、お客さんから預かった宅配便がそのままになってしまい、実は大変気になっていました。失礼ながら中味を確認したら、息子の結婚式の写真を親戚に送ったかったらしい。遅くなりましたが送付して、大変喜ばれました】(根本さん)